

「悔 悟」と「絶 望」

—ルネッサンスの一象徴としての

フォースタスの魔術—

鳥 居 忠 信

〔序〕

この小論の目的は、フォースタスの苦悩が最も顕著に表現されていると思われる一行、

I do repent, and yet I do despair; (xviii. 71)¹⁾

の解釈である。彼の不安定な心はこれ迄様々に解釈されてきた。そして、その解釈の違いから、『フォースタス博士』批評は三種類に大別出来る様に思われる。不可知論的解釈、キリスト教的解釈、そして、これら二つの要素の併存を認める複数主義的解釈である。各々の相違を明らかにする為に要約するならば、不可知論的解釈は、「この劇はヘブライ的、キリスト教的伝統とルネッサンスが真向から衝突した悲劇であるとし、主人公の中に宇宙の秩序に逆らう超人的要素が見出される」²⁾ とする。これに反し、キリスト教的解釈は、「キリスト教々義が根強く浸透していた社会の一員にすぎないマーロウ」³⁾ の書いたこの作品には、「主人公が超人になるに従って非人間的になることから、人間性の拒絶がある」⁴⁾ とし、「恐怖に戦く彼の中に作者の冷笑的皮肉を読み取り」⁵⁾、「この劇は人間の誤謬性と死ぬべき運命を扱った道徳劇である」⁶⁾ とする。複数主義的解釈は、「主人公の苦悩をルネッサンスの人間性とキリスト教々義との葛藤によって説明し」⁷⁾、「この作品をルネッサンス的の気質を持った中世道徳劇と見做す」⁸⁾ ののである。この様に比較してみると、これら三つの解釈の相違は、各々のルネッサンス観の違いにあると考えられる。それ故、ルネッサンスの一象徴であるフォースタスの魔術に焦点を合わせることによって、自分なりの複

数主義的解釈の立場で作品を検討したい。

即ち、問題とする一行を、キリスト教的、且つ、不可知論的に解釈する為に、次の様な方法で考えてみたい。

〔Ⅰ〕フォースタスは何故神学を捨て、神に絶望して迄、学問の対象として魔術を選ぶのか。

〔Ⅱ〕その彼が何故絶望しきれずに魔術を放棄し、悔い改めようとするのか。

〔Ⅲ〕それでは、何故彼は「私は悔い改めようとするにも拘らず絶望してしまう」という苦悩の言葉を吐くのか。

〔Ⅳ〕彼が「悔悟」と「絶望」の神学的意味を熟知していることは、問題とする一行に如何なる意味を与えるのか。

〔Ⅰ〕

フォースタスは総ての学芸の奥義に通じた偉大な学者である。取り分け、神学に関しては、博士の学位を得た程精通している (Prologue. 15-9)。しかし、その彼が何故最も大切な至福よりも魔術を選ぶ (Prologue. 26-7) のか。

論理学、医学、法学、哲学等の学問は彼の「夢のような空想」 (i. 102) を満たす対象ではなく、人間の限界を超えようとする彼に、「未だ依然として、汝は、フォースタス、一介の人間にすぎない」 (i. 23) という不満足感を与えるだけなのである。そして、神学も同様に彼の学問対象となり得ない。彼は大学用語を駆使し、三段論法でもって神学に別れを告げる。確固たる神の律法が人間に不可謬性を求めるならば (大前提)、そして、人間が本来誤りに陥り易い者ならば (小前提)、この和解しない二つの前提には、「それならば、多分、我々は罪を犯し、それ故に死なねばならぬ」 (i. 43-4) の結論しかないと彼は考える。即ち、“*Che sarà, sarà*” (i. 46) の教義はこの推論の正確な帰結なのである。彼に神の恩寵に疑問を抱かせ、絶望させるのは、「人間は永遠の死を遂げなければならない」 (i. 45) という正にこの確信なのである。余りにも厳格な神の律法に、人間の誤謬性を踏まえて挑戦する彼の英雄的態度はぐらつきは

するが、作品の中に一貫して認められる。

彼は神学と訣別し、現世に、人間の可能性に眼を向ける。「悪魔の業」(Prologue. 23), 「呪うべき魔法」(Prologue. 25) と呼ばれる黒魔術こそ「神々しい」(i. 49) ものであり、彼の心を「うっとりさせる」(i. 109) ものなのだ。魔術こそ、絶えず「新しい業績」(Chorus I. 17) を求める彼にとって、「宇宙の神秘を探る」(Chorus I. 2) 手段であり、学問対象なのである。魔術は、イギリスのルネッサンス期に於いて、十分その存在意義を有していた。思考の刺激として、知性の不安を一時的に鎮め、世界支配の力を認識させ、想像力を鋭敏にし、より高い業績への夢を持たせるものとして、魔術は当時の学者達に訴える力を持っていた⁹⁾。フォースタスの魔術は、どんなものにも、到達し得ないものにも働きかけようとする願望に於いて、科学と同じ精神効果を持っていると言えよう。彼の魔術は、錬金術同様、擬似科学として一笑に付すものではなく、誤っていたのはその仮説であり、理論ではないことを知るべきである。

フォースタスは、研究熱心な魔術使にはあらゆるものが約束されると仮定する。

おお、何と無限の利益と歓喜が、権力が、名誉が、全能が、研究熱心な魔術使に約束されることか。(i. 52-4)

そして、その仮定は彼を魔術の虜としてしまう。悪天使 (i. 73-6) と二人の友人——ヴァルディーズ (i. 118-31) とコーニーリアス (i. 135-47)——の魔術礼讃は彼をその仮説の実証へと駆り立てる。第1の学生の台詞——「今となつては、何も彼を改心させる事は出来ないだろう」(ii. 34)——にも明らかなごとく、彼は断乎たる決意でもって魔術に邁進しようとする。それでは、神に絶望した彼が何故迷い、逡巡するのか。悪天使が (i. 73, v. 15), ヴァルディーズが (i. 132) 彼の決意を促し、彼自身何度も決意を新たにしなければならない (i. 133-4, iii. 14-5, v. 6) 理由は何なのか。

フォースタスは、天国と地獄がその支配を廻って争う法廷と言えよう (xviii. 72)。そこへは、彼自身は勿論、善悪両天使を初めとする双方の代弁者達が登

場する。一方が問い、訴えれば、他方は論じ、弁護する。この様な悲劇の緊張を生む二分法によって、彼の不安定な精神状態が描写されていると考えられる。それ故、主人公ばかりに眼を奪われない様にする必要がある。悪天使が *carpe diem* の主張者ならば、善天使は *memento mori*¹⁰⁾ のそれである。第2の学生が、学長の説論が彼を改心させるかもしれないと述べる (ii. 33) 様に、彼の魔術からの離反の可能性が絶えず暗示されていることを忘れてはならない。善天使による魔術の放棄、そして、天を、神を思っ悔い改めよの忠告 (i. 69-72, v. 16, 18, 21) は紛れもなく彼を躊躇させるのである。

しかし、彼にとって魔術の魅力は大きい。メフォストフィリスの恐ろしく深い憂鬱、

神の御顔を仰ぎ見、天国の永遠の喜びを味わった私が、永遠の至福を奪われているのに、数限り無い地獄の責苦に嘖まれないと汝は思うのか。

(iii. 79-82)

それも彼に永劫の罰の恐ろしさを自覚させることが出来ない (iii. 61-3) 程、彼は魔術に取り付かれているのだ。メフォストフィリスに彼の「勇ましい不屈の精神」 (iii. 87) を学ばせる程、彼は悪魔との契約に漕ぎつけようと躍起になる (iii. 104-5)。だが、この様に彼が熱意を示すのは契約のためだけなのか。否、彼はメフォストフィリスによって喚起された自分の心の中の “*Memento mori!*” の叫びを打ち消し断乎たる決意を貫ぬこうとしていると言えよう。

今となっては、フォースタスは当然永劫の罰に処せられなければならない。そして、汝は救われないのだ。それならば、神を、天国を思うことが何の役に立とうか。その様なつまらぬ空想は取り除き、絶望せよ。神に絶望するのだ。そして、ベゼルバブを信じよ。もう後退するな。フォースタス、断乎たる決意を持つのだ。(v. 1-6)

自己劇化の中で呪文のごとく用いるこの “be resolute”こそ、マーロウの劇の主人公達が好む語の一つであって¹¹⁾、フォースタスを英雄的人物にしているの

だ。断乎として首尾一貫する精神が悲劇的なものを経験することを考えるならば、彼の英雄としての決断はこの劇の不可欠な一構成要素であり、彼の最期の時迄維持される必要があるのだ。

この断乎たる決意が彼に悪魔との契約の罪を犯させるのである。それは「二大罪」¹²⁾の一つである。そして、今一つが絶望の罪なのだ。悪天使には善天使が、フォースタスにはメフォストフィリスが対比させられているものの、契約を終える迄は、即ち、魔術の欠陥に気付く第vi場迄は、彼の決意が固いと考えるべきであろう。

〔Ⅱ〕

魔術は科学的面を、即ち、その近世的面を持っている。しかし、魔術は擬似科学であるが故の致命的欠陥を併せ持っている。現象の因果的連鎖を支配する特殊な法則の性質に関して、科学に於ける仮説が合理的、明瞭であるのに反し、魔術に於けるそれは非合理的、暗黙的であるにすぎない¹³⁾。それ故、魔術によってすべてのものが約束されるというフォースタスの仮説はその欠陥を曝すのである。

彼は魂と引き替えに彼のあらゆる命令の履行をメフォストフィリスに条件付ける。しかし、メフォストフィリスにはルシファーの許可が必要なのである (iii. 42-4)。彼の呪文がメフォストフィリスを呼び出したのではない。それは「誘因ではあるが偶然に」(iii. 48) すぎないのだ。彼は結婚を望む。しかし、その宗教的儀式故に「結婚はくだらない儀式にすぎない」(v. 151) という反対を蒙る。彼が世界の創造者について訊ねながら、その答を得られない箇所には明らかに契約条件の違約を読み取れる (vi. 69-76)。彼は魔術によって宇宙の核心に迫りながら、その欠陥故に世界を創造した神を認識せざるを得ない。神人になる希望を抱かせた魔術が彼に「死ぬことを運命づけられた人間にすぎない」(xv. 21) ことを認識させるのである。魔術の生み出すものは「幻影にすぎず、実体ではない」(xii. 55) のである。それ故、魔術に邁進するのに躍起とな

って耳を傾けなかった善天使の忠告が、メフォストフィリスの深い憂鬱が彼の心に思い出される。一旦捨てた神学を彼は意識せざるを得ない。絶望には悔悟が、*carpe diem* には *memento mori* が対比される。

彼は天を仰ぎ見、悔い改めようとする (vi. 1)。それに対し、地獄を作り事であるとして認めなかったフォースタス (v. 128) との対比から、地獄に於ける永劫の罰の恐ろしさを説く (v. 137-8) 必要のあったメフォストフィリスが地獄の代弁者として、即ち、彼の魂を獲得する為ならば何でもする (v. 73) という本来の役割をこれ以降果たすのである。両者の関係が逆転したと言えよう。今度は、メフォストフィリスが、

私は汝に教えよう。フォースタス、天国は汝程、地上で生きている如何なる人間程も美しくはないのだ。(vi. 6-7)

とフォースタスを勇気付けるのである。悪天使も又、精霊となったフォースタスが神の救いにもはや望みを託せれないことを述べ、彼が悔い改めるならば八つ裂きにすると脅迫する (vi. 13, 81, 83)。彼の心は悪魔達によって頑にされ、悔い改めることが出来なくなる (vi. 18)。彼の耳から「フォースタス、汝は呪われているのだ」(vi. 21) という言葉が離れないのだ。人間にとって永劫の罰は避け難いものであるという意識は、依然として彼の心に根強く残っている。そして、魔術によって得られる此の世の「甘い快樂」(vi. 25) に対する気持も断ち切り難いのである。彼はそれならばと再び新たな決意をする。

それでは、何故私は死なねば、卑しく絶望せねばならぬのか。私は断乎たる決意をした。フォースタスは悔い改めはしないぞ。(vi. 31-2)

しかし、その決意も、世界の創造者である神を、契約条件の違約を認識せざるを得ない今となっては、これ迄と違って弱い。悔悟の可能なこと (vi. 82) を、悪天使の脅迫を退けられること (vi. 84) を説く善天使の言葉が彼を神の慈悲に縋らせようとする (vi. 85-6)。

だが、彼の悔い改めようとする気持も現世の苦痛と快樂に打ち勝つ程は強く

ない。彼が悔悟に強く傾く程、地獄はより強い苦痛と快樂を彼に与える。ルシファーとベゼルバブの恐ろしさ故、七大罪の見世物の素晴らしさ故に、彼は悔い改める気持を失ってしまうのだ。永劫の罰よりも、天国の至福よりも、此の世の苦痛と快樂のほうが彼にとっては問題なのである。そして、彼は24年間の快樂に充ちた生活を満喫する。だが、これ迄彼に覚えた共感がこれ以降徐々に薄れていくのは何故なのか。それは魔術を学問対象とする彼の研究態度の欠如であると言えよう。コーラスが研究目的の為の魔術の使用を僅かに説明する(Chorus I. 1-21)だけで、第vii場から第xvii場迄の中間場面では、魔術は彼の戯れの為に、そして、ドイツ皇帝やヴァンホルト公爵の為の余興として使われるのだ。これらの喜劇の中間場面は悲劇の緊張を緩めるだけでなく、彼の低次元での魔術の使用を皮肉っているとさえ言えよう。第iv場のワグナーによる魔術の低級な目的の為の使用が既に暗示している様に、第vii場と第x場に於けるロビンの魔術の使用は、明らかに魔術そのものを揶揄していると言えよう。即ち、もはや魔術はフォースタスにとって「神人」になる希望を断念させ、此の世の快樂のみを追求させるものとなったのだ。魔術の限界が明らかになった以上、残る問題は、彼が地獄の与える苦痛と快樂に打ち勝ち、自分の絶望の念を克服して悔い改めることが出来るかどうかであろう。

〔Ⅲ〕


契約期限の終わりが近付くにつれて、彼は不安になる(xv. 21-4)。彼を悔い改めさせる為、老人が *memento mori* の強力な代弁者として登場する¹⁴⁾。老人の善意に満ちた忠告も、彼の罪とそれに相応しい永劫の罰の意識が非常に強いので、彼を絶望の極限へ、即ち、自殺へ導く効果しかない(xiii. 55-6)。これ迄は「甘い快樂」で癒されてきた断乎として首尾一貫する絶望の念は、そのままではそれ自身をも破壊せざるを得ないと言えよう。だが、老人の再度の忠告——「神の慈悲を求め、絶望を避けるのだ」(xviii. 64)——が効を奏し、彼は自殺を思い止まり、自分の罪を深く反省し、神の慈悲に縋ろうとする。し

かし、それでも尚神の救いに対する疑いを捨てきれない。天国と地獄の間で、即ち、悔悟と絶望の間で苦しむ彼の葛藤が最高潮に達する。

呪われたフォースタスよ、今となっては、神の慈悲はどこにあるのか。
私は悔い改めようとするにも拘らず絶望してしまう。地獄が神の恩寵と
私の支配を廻って胸の中で争っている。(xviii. 70-2)

彼に与えられた最後の悔悟への機会に於いても、彼は又もや悪魔の脅迫に負け、契約をし直す。この様な彼に対して、悪魔の威嚇にも拘らず信仰を守り通す老人が *carpe diem* に対する *memento mori* として対比されるのである。

彼にとって此の世の快樂も又依然として断ち切り難い。彼はルシファーへの誓約を確固たるものにするという理由で、メフォストフィリスに彼の情欲の対象としてヘレンを要求する。だが、これは深まりゆく絶望の念の恐ろしさを癒す為とも考えられる。彼は「悪魔との交わりの罪」¹⁶⁾を犯す。この結果、これ迄巧みに保たれてきた救いか地獄落ちかの均衡は、老人の台詞に明らかな様に終止符を打つ。

呪われた、哀れな人間、フォースタスよ、汝の魂から神の恩寵を締め出し、裁きの座から逃げうせるとは、 (xviii. 119-21)

彼は自分の呪うべき罪——許し難い多くの罪を犯し (xix. 36)、神を冒瀆し (xix. 56)、公然と神を捨て (xix. 55)、魔術の為に魂を売り渡した (xix. 62) こと——を知っている。そして、罪の報いとしての罰——永遠の死 (xix. 29) と永遠の喜び並びに至福の喪失 (xix. 66)——をも十分彼は認識している。彼の心には、人間の誤謬性を踏まえて挑戦したあの三段論法の帰結が、即ち、中世の神学が深く根付いているのだ。それ故、彼は神の救いに望みを託すことが出来ない (xix. 41-2)。しかし、敢然と絶望するのではなく、神に呼びかけるのである (xix. 54-6)。だが、その神への嘆願も悪魔達の阻止によって心からのものとはならない (xix. 56-9)。

人間を絶望へ誘う悪霊として¹⁶⁾、即ち、劇前半のあの断乎とした決断へ彼を

引き戻すかのごとく、メフォストフィリスが登場する。

そうだ。フォースタス、今となっては、汝には天国への望みはない。それ故、絶望し、地獄のことだけを考えよ。そここそ汝の住むべき館に違いないからだ。(xix. 87-9)

フォースタスの前半の「勇ましい不撓不屈の精神」はメフォストフィリスに移行し、メフォストフィリスの前半の深い憂鬱はフォースタスに移行している。

何だ、汝は泣いているのか。遅すぎる、絶望するのだ、さらばだ。

(xix. 97)

即ち、ルネッサンスの英雄的面と中世的、宗教的面の対比が、代弁者は代われど、劇を通して見出されるのである。

善悪両天使が彼に約束されていた天上の至福の喪失と恐ろしい地獄の永劫の罰の確定を述べ (xix. 99-127)、彼の最終独白の苦悩を一層深いものとする。彼は永遠の呪いの恐ろしさから神に呼びかけざるをえない。しかし、同時にルシファーに許しを乞うのである (xix. 149)。神とルシファー双方への服従は彼の最期の瞬間迄認められる。

我が神よ、我が神よ。その様に恐ろしい顔付きで見詰めないで下さい。
蝮よ、蛇よ、私にほんの暫息をさせてくれ。恐ろしい地獄よ、口を開くな。来ないでくれ、ルシファー。私は魔法の本を焼こう。ああ、メフォストフィリス。(xix. 187-90)

「我が神よ、我が神よ」に神の加護を求める聖書の意味を見出すことは必要である¹⁷⁾。しかし“*My God, my God!*”は神ばかりでなく、悪魔達へも呼びかけた叫びと理解出来る¹⁸⁾。この様なフォースタスに対して、我々は恐怖の念から人間の弱さを再確認し、憐憫の念から彼の苦悩に共感を覚えるであろう。言い換えるならば、彼の最終独白は作品の中に一貫して表現されてきた悔悟と絶望の、即ち、道徳劇と英雄劇の両要素でもって終わっているのである。それ故、彼の運命が善悪どちらであるかは観客の判断に任せられると言えよう。

紳士諸君、ただ次のことなのです。私達が今ここに上演せねばならぬのは、善かれ悪しかれ、フォースタスの運命の形態なのです。

(Prologue. 7-8)

「賢明な人」(Epilogue. 5)にとっては「悪」であり、「驕る才子」(Epilogue. 7)にとっては「善」なのである。このことから、我々はルネッサンス期の二種類の間人——中世の神学を受け入れて、敬虔で禁欲的な生活を送る者と悪魔に身を委ねて迄無限の知識を求め、現世の生活を満喫する驕る者——を知ることが出来る。そして、「善」には冒瀆の英雄的面を、「悪」にはその悲劇的面を読み取れるであろう¹⁹⁾。説教的役割を果たすべきコーラスの台詞にも悲劇に不可欠な二分法を認められる。即ち、フォースタスは単なる英雄でも、単なる悪漢でもなく、苦しみ、悩む人間なのである。問題の一行の叫びこそ、正に人間本来の苦悩の叫びと言えよう。そして、この苦悩を更に深いものになっているのが、悔悟と絶望の神学的意味を彼が熟知していることであろう。

〔IV〕

彼は、神の慈悲が許さない罪のないことを、そして、神の恩寵の偉大さ²⁰⁾を当然知っている筈である。悔悟こそ「総ての罪を贖うこの上ない救済の手段であり、神の慈悲と恩寵を我々の元へ引き付ける磁石の働きをする」²¹⁾のである。しかし、悔悟は「心の底から」²²⁾為されなければならない。天国の代弁者達の声に耳を傾けるものの、フォースタスが決して心の底から本当に悔い改めないのは既に見た通りである。

人間は自由意志を持っている。即ち、悔い改めるか、しないかは本人の選択に委ねられるのである。そこには当然不安定な精神状態が生まれる。フォースタスの心の不安定さは天国と地獄の中間に置かれた人間固有のものと言えよう²³⁾。彼の動揺する心はてこかシーソーに喩えられるべきものであろう²⁴⁾。それ故、悔悟のもう一方の端である絶望が問題となる。絶望は「一般的に恐怖を伴う、如何なる希望も、良くなる見込みもない病である。と言うのは、凶事が

予想される間は、我々は恐れるからである。しかし、それが確実な時には、我々は絶望する」²⁶⁾。そして、この病は「我々の罪、そして、正にそれに相応しい神の怒りを自覚する我々の良心によって、即ち、かつて犯した不正な罪に対する罪悪意識を持った良心によって」²⁶⁾ 引き起される。フォースタスの絶望は明らかに神学的意味のそれである。劇前半で断乎たる決断でもってした絶望も、問題とする一行では悔悟と対比させられるだけ、その英雄的要素が減少し、神の怒りを、即ち、永劫の罰の恐ろしさを自覚していると言えよう。

だが、永劫の罰が避けがたいものであるという彼の絶望は、作品の中で、悔悟にとって最も大きな障害の一つとして、神の恩寵に希望を託そうとする彼を妨げてきた一つの大罪である。彼を英雄的、悲劇的人物としているのは、正にこの絶望の認識であろう。「罪の許しに絶望する躓きの罪」²⁷⁾を犯す彼の中に、最高の絶望とも言える、救いの可能性に希望を寄せることなく、むしろ、あらゆる地獄の責め苦を受けても彼自身であることを欲する「悪魔的絶望」²⁸⁾——実存主義者達は正にその絶望に人間としての出発点を見い出す——の片鱗を認めることが出来よう。

悔い改めて、神の恩寵を求めるにも拘らず自己の罪の許しに絶望するフォースタスの中に、キリスト教々義と人間性の葛藤が顕著に表現されていると言えよう。悔悟と絶望の間で苦悶する彼の中にこそ、天国と地獄の間に置かれた、自由意志を持った人間の不可避の運命を読み取れる。『フォースタス博士』は人間の一悲劇史であると言えよう。この作品が悲劇であるのは、それが単に人間の悲惨や苦悩を再現するからではなく、フォースタスの原型であるイカロスや魔術使サイモン・メイガス²⁹⁾と同様、その結末が完全性を目指す、即ち、神であろうとする人間的な企ての挫折であり、破滅であるからなのである。

そして、フォースタスにその企てを行なわせ、挫折させたのが魔術なのだ。それは、中世の黄昏に居る彼に人間の無限の可能性という一つの光明を与えながら、その科学的、近世的仮説にも拘らず、その理論の誤り故に、彼に暮れ行く闇の暗さを認めさせずにおかない。即ち、フォースタスの魔術は、時代の過

渡期として明け行く近世の光と暮れ行く中世の闇を併せ持つルネッサンスの正に一象徴なのである。そして、この魔術が、既に見た様に、その性格故に絶望に悔悟を、そして、悔悟に絶望を絶えず対比させる結果を生むだけに、魔術はこの作品の主題とさえ言えよう。

〔註〕

- 1) 引用は J. D. Jump's edition of *Doctor Faustus* (Methuen, 1965) に拠る。
- 2) Cf. R. B. Sewall, "The Vision of Tragedy," *Twentieth Century Interpretations of Doctor Faustus*, ed. W. Farnham (Prentice-Hall, 1969), pp. 60, 62, 69.
- 3) Cf. M. Poirier, *Christopher Marlowe* (Chatto & Windus, 1951), p. 69.
- 4) Cf. R. M. Frye, "Marlowe's *Doctor Faustus*: The Repudiation of Humanity," *op. cit.*, ed. Farnham, p. 59.
- 5) Cf. L. Kirschbaum, "Religious Values in *Doctor Faustus*," *ibid.*, pp. 77, 79.
- 6) Cf. H. Gardner, "Milton's "Satan" and the Theme of Damnation in Elizabethan Tragedy," *Elizabethan Drama: Modern Essays in Criticism*, ed. R. J. Kaufmann (Oxford, 1961), pp. 321-3.
- 7) Cf. G. W. Knight, *The Golden Labyrinth* (Methuen, 1965), p. 57.
- 8) Cf. W. Farnham, "Introduction," *op. cit.*, ed. Farnham, p. 4.
- 9) There remains the 'impious and damnable' magic of the sorcerer, the fruit of an illicit desire for forbidden knowledge—in a word, the so-called 'black art'. It was a superior craft, and might be defined as the attainment of power by intellectual means. As such it appealed to the learned rather than to the ignorant, to men of science like Paracelsus or Dr. Dee rather than to the humble people who practised the mystery of witchcraft. (J. B. Black, *The Reign of Elizabeth* (Oxford, 1936), p. 331.)
- 10) 酒場にさえ *Memento mori!* の木版画が掲げられていた (Cf. S. Chew, *The Pilgrimage of Life* (Yale, 1962), p. 259.) ことから、説教の流行 (Cf. S. Lee ed., *Shakespeare's England*, Vol. 1 (Oxford, 1916), pp. 49, 67.) から、そして、*The Castle of Perseverance* from *Chief Pre-Shakespearean Dramas*, ed. J. Q. Adams (Houghton Mifflin Company, 1924) の善天使の台詞—"Homo, memento finis! et in eternum non peccabis." (412)—に見られるように17世紀初め迄続いた道徳劇の影響から、その効果は薄れつつはあったが、"*Memento mori!*" の叫びは生のあらゆる局面に跡切れることなく響き渡っていたと思われ

る。

- 11) ギーズは「断乎たる決意」を次のように称讃する。
Oft haue I leueld, and at last haue learnd, That peril is the cheefest way to happiness, And resolution honors fairest aime. (*The Massacre at Paris*, 94-6 from *The Works of Christopher Marlowe*, ed. C. F. T. Brooke (Oxford, 1910).)
- 12) Cf. L. B. Campbell, "Doctor Faustus: A Case of Conscience," *PMLA*, LXVII (1952) pp. 222-3.
- 13) Cf. J. G. Frazer, *The Golden Bough* (Macmillan, 1949), pp. 49, 51-2.
- 14) Cf. J. B. Steane, *Marlowe: A Critical Study* (Cambridge, 1964), p. 147.
- 15) Cf. W. W. Greg, "The Damnation of Faustus," *Marlowe: A Collection of Critical Essays*, ed. C. Leech (Prentice-Hall, 1964), pp. 105-6.
- 16) Cf. R. Burton, *The Anatomy of Melancholy*, Vol. I (Everyone's Library, 1932) p. 188.
- 17) My God, my God, why hast thou forsaken me and art so far from saying me, from heeding my groans? O my God, I cry in the day-time but thou does not answer, in the night I cry but get no respite. (*Psalms* xxii. 1-2)
- 18) Cf. W. Sanders, *The Dramatist and the Received Idea* (Cambridge, 1968), p. 242.
- 19) Cf. G. L. Barber, "The Form of Faustus' Fortunes Good or Bad," *Christopher Marlowe's Dr. Faustus: Text and Major Criticism*, ed. I. Ribner (The Odyssey Press, 1966), pp. 173-4.
- 20) But these men must know there is no sin heinous which is not pardonable in itself, no crime so great but by God's mercy it may be forgiven. "Where sin aboundeth, grace aboundeth much more." (*Rom.* v. 20)
- 21) Cf. R. Burton, *op. cit.*, Vol. III, p. 413.
- 22) At what time soever a sinner shall repent him of his sins from the bottom of his heart, I will blot out all his wickedness out of my remembrance, saith the Lord. (*Ezek.* xviii. 27)
- 23) As long as a man lives in this world, he is kept midway between heaven and hell; this is spiritual equilibrium of free will. (E. Swedenborg, *The True Christian Religion* (Everyone's Library, 1933), p. 540.)
- 24) Spiritual equilibrium, or, free-will, may be also compared to a balance, containing in each of its scales an equal weight;... (*Ibid.*, p. 543.)

- 25) Cf. R. Burton, *op. cit.*, p. 392.
- 26) Cf. *ibid.*, p. 400.
- 27) Cf. キルケゴール『死に至る病』訳松浪信三郎（河出書房新社，1966），p. 131.
- 28) Cf. *ibid.*, pp. 89-91.
- 29) Cf. B. D. Brown, "Marlowe, Faustus, and Simon Magus," *PMLA*, LIV (1939), p. 88.